



バナナ

森川めだか



夏が戻ってきたある日の朝、埃のような雲が空に溜まっていた。

埃だけの海になった空に溶けていってしまいたかった。

それはこの木柳きやなぎかりんのこれから起こる運命を予感していたようなものだった。

「方丈ほうじょうさん、よく眠れましたか」かりんは病院に勤める看護師だ。方丈は入院患者で長い。ガンだが進行は遅い。

「ああ、今日はよく眠れた。昔の夢を見たよ」方丈は穏やかに笑う。

「あら、それは羨ましい」
体温を計り、次の患者に移る。方丈はずっとベッドから窓の空を見上げていた。

「木柳さん、お疲れ様。これ患者さんのご家族から頂いたの。持って帰って食べて」ジンジャーパイだった。

「はい、ありがとうございます、婦長。お先に失礼します」

かりんの家は郊外にある。そこに家族四人で暮らしている。帰りの電車に揺られながら少しうたた寝をした。白い何にもない、空白のような短い夢だった。

「ただいま」

「お帰り」母はキッチンで夕飯の支度をしていた。兄と父がリビングのテーブルに集まっている。そこ

にかりんはもらってきたジンジャーパイを置いた。

「これ、高いやつだ」兄が手を伸ばす。兄はいい歳をして無職だ。

着替えて髪をとかすと、家族四人で夕食をとる。かりんは勤め始めてから間もないのでまだ無理のないシフトで働いている。

「ようやく来週から涼しくなるってね」話を切り盛りするのは専ら女同士で父と兄はあまり喋らない。庭には犬を飼っている。名前はあったのだがしつこく父が「いぬ」と呼び続けるのでいつの間にか犬も他の家族も犬を「いぬ」と呼ぶようになった。

生活は楽ではないが、これで兄も働いてくれれば・・・とささいな悩みも抱えているごくごく平凡な一般家庭だった。

「かりん・・・」父が珍しく食事中に口を開いた。

「仕事はどうだ？」

「まあまあ。辛いこともあるけど楽しいこともいっぱい」

満足そうに父は肯いた。しかし、向かいの母は何か深刻そうな顔をしているのが気にかかった。

夜、自室で勉強をしているとノックの音がした。「かりん？ ちょっといいか」父だ。

滅多にない事なので驚いたが、扉を開くと母もいたので余計驚いた。

「どうしたの」

「ちょっといいか」母は無言だ。

「どうしたの？ お金のこと？」

「ん・・、いや」父も母も床に直に座った。

「許して欲しい」父が頭を下げた、続いて母も頭を下げた。その母の頭は泣いていた。

かりんは言葉が出なかった。

「もうお父さんお母さんと呼ばなくていい。本当に申し訳ない。許して欲しい。かりん、かりんは私たちが昔・・、誘拐してきた子だ」

ゆうかい・・。その言葉は上手く像を結ばなかった。母はずっと頭を下げたままだ。

「ゆうかい？ ゆうかいって？ 私が？ え、何？ 何言ってるの、お父さんお母さん」

「お父さんは、・・いや、僕は昔、金がなくてお兄ちゃんも生まれて、どうしようもなくなつて・・、生まれたばかりの赤ちゃんだったお前を誘拐して金を奪ってそれから誰にも秘密で育ててきた。申し訳ない。お父さんが全て悪い。お母さんには何の責任もないから」そう言っている父の顔が見る見る崩れ、涙が目から次々に溢れ出していた。

「かりん！」母が絶叫した。

「すまない」父が母の背を抱いて、幾度も頭を下げた。かりんの手は震え出していた。

「いいよ。ありがとう。言ってくれて」

それから父と母が出ていくまで、かりんの頭はまるでしびれているように感覚がなかった。次の日の朝、父はいつも通り朝早く仕事に出て、母と朝食を共にした。

「お兄ちゃんは知ってるの？」母の箸の手が止まった。肯いた。

「行ってくるね」兄の部屋の前まで行ったが、声をかけられずに、家を出た。

いぬが「ワン」と言った。

「木柳さん、次、夜勤入ろうか」

「はい！」

「大丈夫、方丈さんは困らせるような事しないからね。後、気をつけるところは・・・」婦長の話もあまり耳に入ってこなかった。

ナースステーションにて。「私の友達の子供がさー、美少年なんだけど、誘拐されかかったんだってー」いつもの楽しい世間話も全く耳に入ってこなかった。

「私の友達の話なんですけどね、友達が小さい頃ゆうかいに遭ってから帰ってこないんですって」かりんは方丈の血圧を測りながら言った。

「美少女だったんですって」

「案外幸せにやってるかも知れないな」方丈の言葉にかりんはハツとした。

「血の火というものがあるからね、実の両親と暮らしての方が辛かったといこともあるし、誤解しないでほしい、ただ世間では常識では計れないことがあって・・」

「分かります」思いがけず強い口調になってしまった。

方丈は黙ってしまった。

「ごめんなさい。怒ったわけじゃないんです」

「人は生まれながらにガンを持っている。内面の反乱だよ」

「内面の反乱・・」

「いつも心にわだかまりを持つてるのが人間というものだよ」

「そうかも知れませんか」方丈と話す時は短い。すぐに次の患者に移る。

そつと盗み見た臥せっている方丈の顔には何のわだかまりも見取れなかった。

「どうしたの？ ・・かりん」リビングから母の影。病院から帰ってきたかりんは犬小屋に麦わらを詰めていた。

「これから寒くなるでしょ？ だから、温かくしてやろうと思って」いぬは嬉しそうにかりんの周りを

回っている。

「何も今・・・、明日やればいいじゃない」

かりんは立ち上がった。影だけが長い。

「もう夕飯・・・」そう言いかけて、母が窓を閉めた。

「なぜ心をそんなに大事にするの！ 形であればいいじゃない！」かりんは窓を開け、リビングに叫んだ。

「かりん」父が席を立って、肩に手をやろうとしたが、かりんは振り払った。

兄はそこにまだいなかった。

この父母が誘拐をするなんて。金のために・・・。

「お兄ちゃんは？」かりんは髪をクシクシにした。

「また、ホラー映画でも見てるんじゃない」

母の顔が湯気で曇っている。

「お兄ちゃん、ごはんよー！」

上でドアの閉まる音がした。

「今日のご飯なに？」兄は変わらない顔を出した。

「おでん」

「おでんにはまだ早いんじゃないかー」

いぬはおでんが好きなので、もう匂いを嗅ぎつけて鳴いている。

「方丈さん、今日から夜勤なんです。よろしくお願いします」

「ああ、こちらこそ」方丈の笑みはいつも柔らかだ。

夜勤の日は夜が浅くて、薄力粉みたいな空が広がると起きているのは方丈とかりんだけになった。

「方丈さん」横に座り何かするふりをしながら話す。

「覚えてます？ 誘拐された子の話。あれ、私なんですよ。・私、今の父母に誘拐された子だったんですって」

方丈は一瞬驚いてかりんの顔を見たが、それからまた元の穏やかな表情に戻った。

「そうですか・」

この病室の窓から見下ろす街並みは海の色みたいな家ばかり。

「今日、よく眠れましたか」

「ええ、お蔭さまで。犬の耳をした蛇の夢を見ましてね」

「あら、方丈さんでもそんな変な夢見るんですね」

二人は少し笑った。

「大丈夫ですか」

「大丈夫です」そう答えて、かりんは席を立った。

夏の空が遠くなる。

心の西たち。

体を吹き抜けた風が木の葉を揺らした。

「すぐ帰ってこい」家族のグループチャットにそんな父のメッセージが残っていた。既読は1だ。多分、母だろう。

「どうしたの？ 今から帰るよ」既読はすぐに1になったが返事なし。

家に帰ると救急車と警察の車両が止まっていた。

かりんは急いで玄関を開けた。見知らぬ男たちが振り返った。

「娘です」母がか細い声で言った。

靴をいつ脱いだかも分からず、家の中に飛び込んだ。

二階に人が集中している。

「お兄ちゃん！？」

兄が人に囲まれて倒れていた。そばには父がひざまずいていた。

「かりん、驚かせたくなかったんだ」

兄は自死していた。部屋で、一人きりで、死んでいたそうさ。

かりんの知っている兄はいつも飄々としていて我関せず、といった感じだったが妹の出自のことで一番悩んで傷付いていたのは兄かも知れない。

内面の反乱。方丈の言っていたガンが兄を死に至らしめたのか。

知らん顔でその日も日が暮れていった。

忌引き休暇でかりんは本当の家族に会いに行った。付き添いは母である。

「かりんは小さい時からミツマタだったからね、すぐ分かると思うよ」母はそつと笑った。

ミツマタというのはつむじが広いことで、木柳家の言葉なのか、正しい言葉なのか知らない。

父からは「どこへでも行っていい」と言われている。

「気を付けて」母が言った。

「あそこの家の人たち。まだ住んでる」母が目で指した家は住宅街の中の何も変哲のない一軒家だった。車が停まっている、自転車も二台、戸口に停まっている。表札には「里見」と書かれていた。

「かりん・・・」母が苦しそうにうめいた。

その後はただ肯くだけだった。

母の背が遠ざかっていく。嘘のような秋晴れの日、振り返ろうとせず。

「お母さん！」

母が思わず振り返った。かりんはその方へ走っていった。

駅に戻って、二人で木柳の家へ帰った。

方丈にも兄の自死のことは言っていない。

「私、悲しみ続けたいんです。変かな」かりんは方丈のタオルをたたみながら言った。

「生きるエネルギーはいつも衝動的だ。僕はいいと思うよ」方丈は少し咳をした。

「足るを知れ、って言葉は昔はよく言われたけどねえ・・・」そう言って方丈は笑った。「古いのかな」と。

雪が虫みたいにざわめく。

夜勤明けのある日、もう一度かりんは生まれた家、「里見」家を見に来ていた。

ある住宅街の一画。

なぜ父母がここを選んだのか知らない。

「風よ、聞かれる時だけ、聞け」

かりんはオーバーのポケットに両手を入れて胸を張った。
曙。

周りには誰もいない。かりんはそつと踵を駅の方に返した。

バナナ

2023年10月28日 発行

著者 もりかわ 森川めだか

町制施行60周年・かなみ知恵の和館10周年記念事業冊子

発行 函南町教育委員会

製本 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

419-0122 静岡県田方郡函南町上沢107番地の1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとして（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関する事）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

看護師として働く木柳
かりん。兄の無職が悩み
の種、という平凡な家族
だと思っていたが、ある
日両親から衝撃の事実を
知らされて……。

